日本の保育の源流について

日本では、富裕層を対象に幼児教育を行う施設（幼稚園）と、家庭のかわりに乳幼児の養育を担う施設（保育園）とがそれぞれ別途に展開してきたようにみえるが、いずれも「子どもを保護し教育的働きかけを行う」という西洋の保育思想を受け継いでいる。

西洋の保育施設は、幼児を保護し教育するものとして、18 世紀末以降に普及・発展していった。日本では明治初期から、文部省の主導により、それら西洋の保育を模倣した幼稚園が開設された。主に富裕層の子どもたちに就学準備教育を行う幼稚園は明治後期から増えていき、鎌倉に**ハリス記念鎌倉幼稚園や明治幼稚園**が開かれた 1910 年（M43）頃には、全国に約 450 園が存在していた。

一方、労働の必要や貧困のために育児ができない家庭のための保育施設は、主にキリスト教宣教師や民間の有志によって開かれた。子守学校や工場に附設された託児所、貧民街のセツルメントなどに始まるこれらの施設は、大正期以降に急増し普及した。1896 年（M29）開設の**腰越保育院（のち鎌倉保育園）**は、全国的にも早い事例といえる。